

アントニオ・グラムシの政治理論とレーニン主義 (上)

八木沢二郎
Yaginawa Jiro

一九一七年、ロシア革命の成立と共に、それは、「世界革命の序曲」としてヨーロッパ全土に波及する事が期待された。だが、一九一九年のドイツ革命の流産(ローザ・ルクセンブルグの死)をはじめ、ベラ・クーンのハンガリー革命、「赤い二年間」等々、すべて敗退した。

ジョルジュ・ルカーチは、このドイツ革命の流産と自己のかかわった一九一九年の短命のハンガリー革命の総括として『歴史と階級意識』を書いた。ローザ主義者としての残渣をとどめながら、レーニンを吸収して「何をなすべきかの自然発生性と目的意識性——党の指導性の決定的重要性」を確認する。ルカーチは、「ローザが、革命における党の役割を、他の多くの人びとよりも早くはつきりさせた」(『歴史と階級意識』白水社版、p.91)、「ローザ・ルクセンブルグは、組織というものが革命的な過程の前提というよりはむしろその結果であって、プロレタリアート自身この過程のなかでのみ、そしてこの過程を通してのみ、みずからを

アートと結びつくであろうということから出発している」(p.466)。

ルカーチは、このようにローザを批判し、レーニンを吸収して組織＝党の決定的重要性を説いた。

そして、資本主義特有の「物象化」の中で、プロレタリアート以外の階級は虚偽の意識しか持つことはできない。それに対してプロレタリアートにとっては「他の階級の場合とは反対の機能をもちつつであるが、……プロレタリアートは階級社会一般を廃止することなしには、階級としてのみずから解放することができない、というまさにこのことによって、プロレタリアートの意識、すなわち人類の歴史上での最後の階級意識は、一方では社会の本質を暴露することと合致し……」(『歴史と階級意識』同上、p.141)。

しかし、革命的危機以前の段階では客観的な階級意識の発展に対して、日常的・心理学的意識の水準にあり、ここに日和見主義の理論の基礎があるとして、「プロレタリアートの正しい階級意識——そしてその組織形態である共産党」(p.150)がこの落差を埋め、正しく導いてゆくとした。

このように、ルカーチは、資本主義のからくりとしての「物象化」と、プロレタリアートの階級意識という地点から、自己の革命の経験の総括を行った。「ハンガリア革命の経験は、すべてサンデイカリズム理論の脆さ(革命における党の役割)をひじょうにはつきり教えてくれた」(平井訳『歴史と階級意識』p.352、未來社)

階級に構成しうるのだということをも、早くから認識していた」(同上、p.92)。「この過程のなかで、党はある崇高な役割を、すなわちプロレタリアートの階級意識またはその歴史的使命の確信の担い手とする」(同上、p.92)と評価しつつ、ローザの「ロシア革命批判」を批判して、ローザの見地が弁証法的ではなく「有機的」であるとし、ボリシェヴィキとメンシェヴィキとの組織問題をめぐる闘争でのローザの立場を批判する。「彼女は日和見主義との闘争をもつばら党の内部での精神的闘争と考えている」(p.467)。このように考える前提は、革命に対する自然成長的な考え——「彼女はプロレタリア革命をブルジョア革命の構造的形態のもとに思い浮かべている」(p.464)——があるとして、「ローザ・ルクセンブルグは、一方では、労働者階級がブルジョア社会の民主主義的な幻想に毒されている迷路に導かれることはなく、その階級だけで統一・革命的に革命のなかへ入りこむであろうということから、他方では、経済状態の革命的な尖鋭化によって社会的な定在が致命的な脅威にさらされている、ブルジョア社会の小ブルジョア層が、党派的にも組織的にも闘うプロレタリ

アントニオ・グラムシ(1891～1937年)も又、一九一九、二〇年のイタリアの「赤い二年間」と云われる第一次大戦とロシア革命後の革命情勢の中で、トリノでの工場評議会運動を指導した。そして、やがて、この運動(多分にサンデイカリズム的傾向を帯びた)の自己批判として「ヘゲモニー」の概念と先進資本主義国での「市民社会」の構造の分析を行った。

ルカーチもグラムシも、ロシア革命の影響の下に、大戦後の革命運動を体験し指導し、いずれもが、サンデイカリズム的傾向の克服をレーニン(ロシア革命)の吸収を通してなそうとし、「党の決定的重要性(ルカーチ)を確認する。

だが、ルカーチの党は、「物象化と階級意識」という論脈の中で「プロレタリアートの階級意識またはその歴史的使命の確信の担い手」(『歴史と階級意識』白水社版、p.92)というきわめて原型的レベルのものである。ルカーチは、ローザ批判(ローザ主義者としての自己批判)を通してその「有機的、自然成長性」をレーニンによって克服しようと主観的には意図したのであろうが、上記のような論脈は、あえてレーニンを必要としない、マルクスの原型的確認なのである。

これに対してグラムシの「市民社会とヘゲモニー」という論脈は、変革すべき対象として「市民社会(グラムシ流にいえば「西方」)という現代を問題にし、又、レーニンとロシア革命から「ヘゲモニー」という概念を抽出し、それが、マルクス主義の新しい段階である事(「イリッチ——レーニン——は、哲学を革新した」)を確認した。

ほぼ同時代（ルカーチ一八八五年生、グラムシ一八九一年生）の二人のすぐれた西欧マルクス主義者であるが、ロシア革命とレーニン理解、及び、変革すべき「現代」（特に先進資本主義社会）へのアプローチに於いて、我々に迫るのはグラムシである。

〔注〕ルカーチとグラムシとの直接的接点については、私の知る限りでは、グラムシのルカーチへの言及のみである。「グラムシ選集2」p.108「実践の哲学にたいするルカーチの立場を研究する必要がある。ルカーチは、自然にたいしてではなく、ただ人間の歴史にたいしてのみ弁証法を語ることで、きりと主張しているようである。まちがいかもしれない正しいかもしれない。……中略……おそらくルカーチは、「民衆のための教程」（プハーリン）にたいする反作用によって、反対の誤ちに、観念論の一形態に陥っているのではあるまいか」。

アントニオ・グラムシ（1891～1937年）は、一九六八年の『世界同時革命』（アルチュセール）以降の運動の退潮と、二〇世紀後半の『社会主義の崩壊』の中でのマルクス主義全般の後退の中で、現在も評価されている唯一のマルクス主義革命家であると云える。例えば『オリエンタリズム』の中のサイードの言及や、スピヴァック『サバルタンは語る』と『できるか』、あるいはカルチュラスタディーズの一派等である。これらは、確かに、グラムシのヘゲモニー論や、知識人論を援用する。しかし、これもグラムシがレーニンから引き継いだヘゲモニー論の核心部分を除

た。有名な機動戦・陣地戦の件、「機動戦は一九一七年に東方に適用されて輝かしい勝利をおさめ、一方、陣地戦は西方での唯一の可能な形態であった。……イリッチ（レーニン）は、機動戦から陣地戦への変化の必要性を、理解していたとわたしは思う。それが「統一戦線」方式の意味だと思う」（『選集1』、p.180）。又、それとの対比でトロツキーの永続革命論への批判がなされる。

「『永続革命』についてのブロンステイン（トロツキー）の有名な理論は、機動戦の理論の政治的反映ではないだろうか」（同上、p.170）、「一八四八年当時の「永続革命」の定式は、政治学のみから仕上げられ、克服されて「市民的ヘゲモニー」の定式となった」（同上、p.196）。

以上のように、グラムシは、先進資本主義に於ける革命が、ロシアと異なって何故敗北したのか、そこにどのような困難な条件があるのか、そして、それに立ち向かうためには、レーニンに依りつつどう更に発展させるべきかという事を一貫して考え、それを「獄中ノート」として記した。

我々にとつても、結局、先進国革命の敗北が、「一国社会主義」をつくり、スターリン主義を生みだし、やがて「社会主義の崩壊」をもたらしたとすれば、このグラムシの提起はさけて通れない問題である。

■ 「永続革命」の構造

去する所から出発している（典型的には「知識人と権力」みずず書房に於ける上村忠男氏の『グラムシを開く』）。他方では、日本の新左翼は、イタリア共産党の創始者としてのグラムシから、当然のように、トリアッティ路線＝構造改革路線の原点でもあるという根強い偏見を持っている。

トリアッティや日本の構造改革主義者が、そのように主張し見せかけようとしたのも事実であるが、後に述べるようにグラムシと構造改革路線なるものは、まったく無縁である。

〔注〕結論には賛成ではないが、この無縁さを論じたのは佐治孝夫「ポスト・マルクス主義の政治理論」論創社

グラムシが問題にしたのは、「赤い二年間」の工場評議会運動の敗北とムツソリーニに率いられたファシズムの勝利、あるいは、ドイツに於ける革命の流産——総じて、ロシア革命の成立にもかかわらず、先進資本主義国での革命は、何故敗北したのかという事である。その事を、一方では、ロシアのように資本主義の発達が遅れ市民社会が未成熟な「東方」に対し、市民社会の成熟した「西方」という条件の分析として、即ち「東方では、国家がすべてであり、市民社会は幼稚でゼラチン状のものであった。ところが西方では、国家と市民社会とのあいだに正確な関係があり、国家が動揺するとすぐに市民社会の頑強な構造が姿をあらわした」（『グラムシ選集1』、p.190）。

他方では、このような「西方」での革命はレーニンから学んだ「ヘゲモニー」の思想によってなされねばならない事を主張し

これまでの成立した革命は、すべて「永続革命」型のものであった。ロシア革命、中国革命、キューバ革命、ベトナム革命、これらは、すべて、プロレタリアートのヘゲモニーによって、しかし、さしあたっては、ツァーの圧政や、植民地支配からの解放を課題とし、なされた。歴史的には、この「民主主義的課題」を解決すべきブルジョアジーが、歴史の発展段階の中で反動と結び、あるいは去勢される事によって、その課題を解決する能力を持たず、その解決の担い手はプロレタリアートしかない。しかしながら、プロレタリアートは、この民主主義的課題を解決すると同時に、その本性からして当然にも社会主義革命を同時、一挙的に遂行する。このようなものとしての永続革命であった。

トロツキーは、永続革命論を「複合発展の法則」——「それは、相異なる発展段階の接合、別々の段階の結合、時代遅れの形態とも、近代的な形態とのアマalgam」（トロツキー『ロシア革命史1』岩波版、p.55）から論拠付けた。つまり、イギリスやフランスと異なり遅れて資本主義の発展に入った国々は、一方で封建的な遺物を残しながら、他方で、最も進んだ技術を取り入れ資本主義の急速な展開を見る。このような諸国での階級関係は、その先例であるドイツのように、ブルジョアジーは、旧支配層、地主（ユンカー）と結び、去勢され、他方で先進的なプロレタリアートを生みだす。このような国では「ブルジョア革命の重荷を全部プロレタリアートの肩に負わせる」（トロツキー「結果と展望」、『ロシア革命史』岩波版、p.439）。

従って、ブルジョア民主主義的課題からはじまったとしてもブ

ロシアの革命政府は「いったん権力が掌握されれば、最小限綱領と最大限綱領とのちがいは原理的な意味も直接の実践的な意味も失う。プロレタリア政府は、そのちがいの枠の中にとどまることは絶対にできない」(「結果と展望」岩波版、p.441)

そもそも、マルクスのプロレタリアートの発見自体、一面では、遅れたドイツ革命の要請でもあった。

マルクスは云う。「フランスやイギリスで終末を迎えはじめていることが、ドイツではいまやっと始まりかけている」(『ヘーゲル法哲学批判序説』岩波文庫版、p.88)。「近代国家の世界の文明的欠陥を、われわれがたっぷり享受している旧体制の野蛮的欠陥と結び合わせざるを得なくなつて」(同上、p.88)。このようなドイツでは「ラディカルな革命がユートピア的な夢なのではなく、普遍人間的な解放がユートピア的な夢なのでもなく、むしろ部分的な革命、たんに政治的なたけの革命、家の支柱をそのままに残す革命こそがユートピア的夢なのである」(同上、p.90)。「フランスでは、部分的解放が全般的解放の基礎である。ドイツでは全般的解放があらゆる部分的解放の不可欠の条件である」(同上、p.93)。そして、このような全般的解放の担い手は「人間の完全な喪失である」ような階級プロレタリアートであり、「ドイツ人の解放は、人間の解放である」(同上、p.96)。このような考えは、更に進んで「共産党宣言」では「共産主義者は、その主要な注意をドイツに向けている。それは、ドイツがブルジョア革命の前夜にあるからであり、またドイツは、一七世紀のイギリスや一八世紀のフランスよりも、ヨーロッパ文明全般の、より進歩した

り、もつとも革命の徹底性をもっているから」(同上)。

以上見てきたように、ドイツ→ロシア→中国、あるいはキューバを含めて、これまで成立した革命は、いずれも永続革命の論理と構造を持つものであった。東方には、圧政と貧困、あるいは、いわれのない他民族による支配と収奪があり、これに対する民主主義、平等、貧困からの解放という大義に論理を与えるものとして永続革命論はあり、ロシアと中国をはじめとする民族解放闘争で現実のものとなった。

しかし、市民社会民主主義の成立している先進資本主義国家での革命はどうか。グラムシが問うたのは、その事である。

しかし、それ以前に、ロシアのような遅れた国で(プロレタリア)革命が成立する事は、当時に於いては驚きであった。当然にも、マルクスが『資本論』で述べたように資本主義が発展し、二大階級の階級闘争が進展した先進資本主義に於いてこそ革命は成立すると考えられてきた。レーニンが、「また革命的であった時」と認める第二インスターの最大の理論家カール・カウツキーは、「権力への道」(河出書房、世界大思想全集14)の中でそのようなものとして革命の進展を描いた。そこに描かれた第二インスターの典型的な図式は、「ローザ・ルクセンブルグもクララ・ツェトキンも、レーニンもトロツキーも」(同上、p.177)認めたものであった。

グラムシの出発点も、この図式の破れ、驚きである。いわゆる「資本論に反対する革命」(『グラムシ選集5』)であり、「史的唯物論の教条にしたがえばロシア史はこの批判的図式の枠内で発展

諸条件のもとに、そしてはるかに発達したプロレタリア階級をもつて、この変革を遂行するものであるからであり、したがってドイツのブルジョア革命は、プロレタリア革命の直接の前奏曲たりうるものと見なくてはならない」(『共産党宣言』岩波文庫、p.86)。

そして、ドイツからロシアへ、更に東方へ移つて、中国革命(あるいは、総じて、ロシア革命以降の民族解放闘争)に於いても、「われわれの闘争の目的は、民権主義から社会主義へと転化することである。われわれの任務の第一歩は、労働者階級の大多数をかちとり、農民大衆と都市の貧民を起ち上げらせ、地主階級を打倒し、帝国主義を打倒し、国民党政権を打倒して、民権主義革命を完成することである。この闘争の発展から、さらにひきつづいて社会主義革命の任務を履行していかなばならない」(毛沢東「書物主義に反対する」)。

毛沢東は、「だが、われわれの敵か、だが、われわれの友か」(『中国各階級の分析』)を明確にしなければならぬとして、「第一、大資産階級の経済的に立ちおくれた半植民地の中国では、大資産階級は完全に国際ブルジョア階級の附属物であり」(同上)、それに対して「いっさいの小資産階級、半無産階級、無産階級は、われわれの友である」(同上)。そして、植民地解放にともなつてできる権力は「ブルジョア民主主義が労働者階級の指導する人民民主主義に席をゆずり、ブルジョア共和国が人民共和国に席をゆずつた」(毛沢東「人民民主主義独裁について」)。そして、この独裁には「労働者階級の指導が必要である。なぜなら、労働者階級だけがもつとも遠くを見通すことができ大公無私であ

しなればならなかつたであろうが、事実がその図式を粉砕してしまつたのだ。ポリシェヴィキはカール・マルクスを否定する」(同上、p.74)とし、第二インスターの図式——革命は、進んだ資本主義国での階級闘争の進展とプロレタリアートの自覚の深化の中で、多数を獲得して権力へ(「ローザ・ルクセンブルグ『ロシア革命論』)——を、「マルクスの学説は、かくて、プロレタリアートの無気力の学説となつた。のみならず主意主義がまったく否定された」(同上、p.152)と批判する。

ここには、後のブハーリン(スターリン)批判に連続する第二インスターの実証主義・客観主義批判がすでに登場している。

IV グラムシと工場評議会

グラムシは、一八九一年、サルディニアに生まれ、イタリアの工業の中心(フィアットの拠点)トリノ大学を出た後、イタリア社会党の機関紙「アヴァンティ」トリノ編集局に属した。ロシア革命の影響と大戦後のイタリアでの階級闘争の激化、そしてイタリア社会党(大戦中、他国の党と異なり一貫して中立の立場を保つた)の諸傾向への分化の中で、一九一九年、トリアッティヤタスカと共に「オルディーネ・ヌオーヴォ」を創刊し、「赤い二年間」と云われる一九一九・二〇年の闘争、とりわけトリノの工場評議会運動を指導した。グラムシは、ロシア革命から、一方で、先に述べたロシア革命を指導した理論を理解し解釈しようとしながら、他方で、現実の運動として労働者階級の権力として

の「ソヴィエト」に着眼した。

「ソヴィエトにたとえられるようなもの、なにかソヴィエト的な性質をもっているものが、イタリアにはないのかな。ソヴィエトは普遍的な形式であってロシアのただけの機構ではないのだ」(「グラムシ選集5」, p.132)。「そうだ、イタリアには、トリノには、労働者政府の、ソヴィエトの芽がたしかにある。それは工場内部委員会なのだ」(同上, p.132)。このようにして、「オルダイン・ヌホーヴォ」は、工場評議会運動の指導機関となった。いかにも、ロシアの「ソヴィエト」、ドイツ革命で登場した「レーテ」、イタリアの「評議会」、あるいは、やや性格を異にするが、イギリスのショップ・ステュアート運動、これらは、帝国主義段階での「革命の現実性」の時代での労働者権力の普遍的な型なのであった。

マルクスは、労働者階級の権力、プロレタリア独裁の萌芽、原型として一八七一年のパリ・コムミュンを確認した(「フランスの内乱」)。そのコムミュンの原則は、現在に生きるとしても、その形態は、後にエンゲルスが「フランスに於ける階級闘争」への序文にすでに述べているように、ロシア革命以降の「現代革命」と大きく異なる。一七八九年フランス・ブルジョア革命→一八四八年二月革命→一八七一年パリ・コムミュンと続く革命は、いずれもエンゲルスの云う、街頭、バリケード戦であり、パリ・コムミュンと云えどもその延長上の地域コムミュンであった。

これに対して、一八七〇年以降の独占「帝国主義段階」への移行、図式化すれば、基幹部の社民と下層の急進主義———の中の「多数を獲得せずに」急進主義の「早すぎた蜂起」による革命の挫折も又、ある普遍性を持つている事を述べておいた。又、この社民的基幹部を基盤としてあたかも革命路線化したものが、人民戦線→構造改革(トリアツテイ)路線である事、これに対して基幹部をも獲得できる急進主義(者)による急進主義の克服が必要であると述べておいた。

いずれにしろ、評議会が、それ自体として、権力の萌芽(二重権力)であるとしても、真の権力でない事、二重権力から権力奪取にいたる「多数の獲得」=武装蜂起(この番号が重要である)には「党」が決定的重要性を持つ。この事は、レーニンの四月テーゼ以降(二月→一〇月)の活動が示し、又、ルカーチも指摘するようにドイツ革命とローザが否定的に示している通りである。

グラムシと「オルダイン・ヌホーヴォ」の指導した赤い二年間(一九一九・二〇年)のトリノ工場評議会運動も二〇年後半に敗北し、やがて二二年のファシズム(ムッソリーニ)政権の成立に到る。

グラムシは、先に述べたロシア革命とレーニンの思想を更に研究し、そして、この工場評議会運動の経緯をふまえて、やがて「南部問題にかんするいくつかの主題」(「選集2」)を中間項に置いて「獄中ノート」での「市民社会へゲモノ」の概念へ到るのだが、この段階でのグラムシの考えは二つの問題を含んでいた。第一は、いわば歴史的限界である。即ち、トリノが当時のイタリア最大の工業都市であるとは云え、局地での運動が、権力奪取

その基礎となった重化学工業化に伴い、工場を持つ比重は決定的に変化した。この事は、すでにローザ・ルクセンブルグの大衆ストライキ論(「大衆ストライキ、党および労働組合」)、又、グラムシも影響を受けたジュールジュ・ソレルの神話「ゼネスト」(「暴力論」)にも表現されていた。

そして一九〇五年のロシア第一次革命以降の「現代革命」に普遍的なものとしてソヴィエト「評議会」が登場してきた。市民革命からプロレタリア革命への移行「革命の現実性を表現するものこそ評議会であった」。

しかし、当然の事ながら、成立した評議会「二重権力状態」での労働者人民の組織が、直ちに労働者階級の権力を意味するわけではない。ロシアでは、二月→一〇月の過程で、エスエル、メンシエヴィキの多数から、ボリシエヴィキ多数への移行(ソヴィエトでの)の上で、最終的には武装蜂起に成功した時はじめて労働者の権力となった。他方、ドイツでは、レーテの成立にもかかわらず、スパルタクスはもちろん、革命的オプロイテ(ないしはUSPD「独立社会民主党」)もSPD(社会民主党)より多数になる事なく蜂起に打って出て、反革命武装に敗北した。

流行りの「評議会」論の多くは、このような歴史的総括を踏みに、労働者階級の自己権力として賛美する。

そして多くの場合、スターリン主義や、日本新左翼の党建設への嫌悪から、党と対置したものとして描かれる。評議会の現代革命にとつての普遍性について私は、ずっと昔に指摘しておいた(「ドイツ革命の敗北とローザ」)。そして、評議会の分裂——単純

という全国的課題を解決できるはずもない事、又そのような全国的指導に必要な党は、未分化な社会党であり、共産党がボルディエガを中心に結成されるのは一九二一年である。これには、イタリア社会党が、大戦中、他国の多くの社会党と異なり一貫して中立・平和主義を貫き参戦に反対していた事、又、コミンテルンにも参加していたことが影響している。従って、当時の若いグラムシに対して、ローザに対すると同様の「遅すぎた分離」(レーニン)という批判はあたるまい。

もう一つの点は、明白なサンディカリスムの傾向である。「これは労働・分業のひとつの歯車なのだ。労働者はこのかれの「特定の必要性」をはっきり意識しなければならない。そしてその意識を、国家型の代議機構の基礎にすえなければならぬ。」(「選集5」, p.113)。「労働者階級は、産業内権力が、産業内権力の源泉が工場にもどらなければならぬと主張する。そして労働者の観点からあらたに工場を見なおす。つまり工場を、労働者階級が自分自身を特定の有機体としてきざぎざあげた形式としてとらえるのだ。新しい国家、労働者国家の細胞として……」(同上, p.114)。

しかし、労働者階級に対するブルジョアジーの支配は、単に直接的生産過程にあるわけではない。従って又、労働者の階級意識(歴史的使命の自覚)は、直接的生産過程での「特定の必要性」を自覚する事によってなされるわけではない。

以上のように、この時点でのグラムシの考えは、一方で、ロシア革命の影響によって第二インター的な革命への図式ではなく「主義主義」であり、かつサンディカリスムの傾向を持つものであった。

多くの良質の革命運動は、当初、急進主義の姿を取り、そして一敗地にまみえる。そして、理論的にも実践的にも自己批判し、急進主義が具体性と客観性を獲得した時、革命的となる。後に述べるようにマルクス自身が然りであったし、グラムシにとつての急進主義の理論的姿は『永続革命論』であった。だから、トロツキーへの（アンビバレントな）批判、こだわりは、実は自身の急進主義への自己批判だったからである。

V

グラムシが、一方で『資本論に反対する革命』としてのロシア革命論——第二インター的發展論図式との対比からすれば永続革命的な——とサンデイカリズム的な工場評議会運動、いわば二つの急進主義を克服する上で、決定的に重要であったのは、コミンテルン体験であったろう。即ち一九二一年のグラムシも参加したボルデイガを代表とするイタリア共産党の創設と、一九二二年、グラムシは、その代表としてモスクワにおもむく。コミンテルン四回大会の年である。四回大会は、大戦後の危機と革命情勢の波が引き、相対的安定期に入りつつある時に、それに見合った「統一戦線」戦術が提起された大会である。

グラムシは、後に獄中ノートで述べている。「イリイチ（レーニン）は、機動戦から陣地戦への変化の必要性を、理解していたとわたしは思う。そして、これが「統一戦線」方式の意味だと思う。……中略……ただ、イリイチは、かれのこの方式を深めるだ

りをおかしたという印象、つまり、われわれが自分で今後の成功への道を断ってしまったという印象を受けた」（『レーニン全集3』p.48）、「決議は、あまりにロシア的である。それはロシアの経験を反映している。だから、外国人にはまったくわかりにくい」（同上、p.49）という半ば謎めいた主張も、上記のトロツキー、グラムシの論と符合しているのであろう。

しかし、このような四回大会の意味を掘り下げるのは、後の獄中ノートに於いてであり、この段階では、ロシア革命とレーニンを吸収する事によって、先に述べた二つの急進主義を克服し、それは「リヨンテーゼ」と「南部問題にかんするいくつかの主題」に結実する（一九二六年）。

「トリノ共産主義者は、「プロレタリアートのヘゲモニー」問題、すなわちプロレタリア独裁と労働者国家との社会的基礎の問題を具体的に提起した」（選集2、p.295）。

トリノ評議会運動の時期でも南部問題は提起されてはいた（同上、p.283,283）。しかしロシア革命のアナロジーによる労働同盟として公式的であり具体性に欠けていた。「南部問題」では、後のヘゲモニー概念へ続く考えが萌芽している。「プロレタリアートは階級としての支配力をうるために、あらゆるギルド的残滓とサンデイカリズムのあらゆる偏見ないし装いを自ら取除かねばならない。……中略……ある種のエゴイズムにうちかつかつことが必要である。……中略……のみならずさらに一歩進んでつぎのように考えねばならない。すなわち、農民と知識人とを指導することをめざし」（同上、p.293）。又、獄中ノートに続く『知識人論』

けの時間をもたなかった。かれがそれを、理論的にだけは深めえた、ということを考えに入れても、やはりそれは残念なことだ」（選集1、p.180）。この後節で、トロツキー批判が述べられるのだが、他方で、グラムシは、トロツキーからも大きな影響を受けていた。トリアッティによって獄中ノートから削除されたが、グラムシは「戦術方法の見直しを始めようという試みは、第四回大会でレフ・ダヴィドヴィチ・ブロンシュテイン（トロツキー）が説明したことをあげるべきであろう。その際は彼は東方と西方の戦線との対比をおこなった。東方の戦線はすぐ失敗に終わり、その後は未曾有の闘いが続いた。西方の戦線の場合まず先に闘争が起ることになる。つまり攻撃がおこったところでは、市民社会がこの攻撃の前か後に抵抗するのかが問題となってくる云々と。しかしこの問題はもっぱら素晴らしく文学的な形で説明されただけで、実際の指示はなかった」（『トロツキーとグラムシ』p.80）、小原論文より重引、社会評論社。これは、正にグラムシが問題にした東方と西方の問題提起そのものである。

（注）トロツキーからのグラムシへの言及は、一つは『文学と革命』（岩波版（上））での「イタリア未来主義にかんする同志グラムシの手紙」p.281。又、ファシズム論について小ブルジョアの役割を強調してファシズムを正しく分析し得たのは「アントニオ・グラムシ唯一人であった」と述べている。

レーニンは、最晩年のコミンテルン四回大会で、次のように述べる。「私は、われわれが、この決議（三回大会の）で大きな誤りの原型もこの「南部問題」に登場している。「南部問題」から「獄中ノート」への発展は、むしろ独自の思考の過程と浄化があるが、その際、外的インパクトとして次の三つの要素があったろう。第一は、ファシズム体制の持続である。グラムシを含めてイタリア共産党もコミンテルンも、ファシズムがそう長く続くとは考えていなかった。第二は、ロシア共産党の党内闘争、トロツキーとスターリンとの闘争である。周知のように、グラムシは、ロシア共産党に書簡を送って「現在の危機の鋭さとそれが内包する公然・隠然たる分裂の凶兆は、われわれ諸党における発展と練成の過程を阻み、右と左の偏向を固定させ、勤労者の世界党（インタナショナル）の有機的な統一の成功を再び遠ざけようとしています」（『ソ連共産党中央委員会への手紙』、『グラムシ・セレクション』p.81、平凡社）。「ジノヴィエフ、トロツキー、カーメネフの同志たちは……われわれの先生でした。……中央委員会の多数派が、闘争において相手を叩きのめそうとせず、行き過ぎた措置を回避するつもりであることを、われわれは確信したい」（同上、p.82）。

この闘争は、グラムシに、レーニンとトロツキー、あるいはスターリン、ブハーリンの思想的相違の検討を迫った。

第三は、この第二との関連で、勝利したスターリンの方針転換である。国内ではネップから急速な工業化をうたう五カ年計画へ、そして、グラムシにとつて重要だったのは、統一戦線論の放棄と第三期論と主要打撃論である。周知のように、この方針は、ヒッラー登場時のドイツに於けるドイツ共産党の敗北を決定付け

た。イタリア共産党も当然、この方針に転換し、獄中にいたグラムシは、反対して孤立したとされる。

(注) この事で、トリアッティとの亀裂が生じたと言われるが、一方では、友人スラッファを介して一貫した交流があったとも云う。(因われ人アントニオ・グラムシ) 青土社)

この事も、レーニン、トロツキー、スターリン(ブハーリン)の思想と方針を検討させる要因となつたであろう。

VI

グラムシが「獄中ノート」で追求したのは、以上述べてきたように、ロシア革命の独特の受容と工場評議会運動の指導に始まり、ファシズムの成立と、コミンテルン体験(レーニン主義と、その後、トロツキー、スターリンの党内闘争とスターリンの勝利)を経て、イタリアないし先進資本主義国での革命が何故敗北したのか、その困難性の客観的条件と勝利への主体的思想的条件をさぐり出す事にあつた。

冒頭述べたように、グラムシの考え——特に陣地戦をもって、その後トリアッティによって推進された構造改革の源流と見なす考えが(左、右を問わず)依然として残っている。

(注) 最近では、スカ秀実「1968年」ちくま新書、p.281

しかし佐治孝夫氏が(『ポスト・マルクス主義の政治理論』論

メントとして「軍事的力関係のメント」をあげ、「これは、しばしば直接に決定的なものとなる(歴史の発展は、つねに、第一のメントと第三のメントのあいだを、第二のメントを媒介として、振動している)」(同上、p.149)。

これは、第二のメントたる政治を前提として、しかし、最終的には、軍事Ⅱ武装蜂起によって革命が決着付けられるという主張に他ならない。

グラムシの中で一番膾炙している「機動戦と陣地戦」という用語をもって、機動戦Ⅱロシア革命型の武装蜂起路線、陣地戦Ⅱ組合、協同組合、自治体等の諸機関Ⅱ陣地を奪取してゆく路線のごとく理解するのはまったくの俗流の解釈なのである。

先に引用した「東方と西方」、「機動戦と陣地戦」、「水統革命とヘゲモニー」という対になっている概念をどう理解すべきなのだろうか。

革命は、時代の矛盾の集中的な爆発であり、新しい時代を切り開く槌である。一七八九年フランス革命→一八四八年二月革命→一八七一年フランスの内乱(バリ・コンミュン)と続く革命は、時代、即ち、産業資本主義の成立→確立→成熟と独占資本主義(帝国主義)への移行の開始と対応している。そして、この時代に対応した革命の主体と組織と革命論(イデオロギー)を持った。

産業資本主義の成立期の絶対主義打倒のブルジョア革命の最先端を表現したルソーは、その一般意思によって徹底した民主主義を主張した。レーニンが云うように「徹底した民主主義が、一方では社会主義へ転化するが、他方では社会主義を要求するという

創社」詳しく論証しているように構造改革路線とグラムシは無縁のものである。トリアッティが、自分の方針のためにグラムシの「獄中ノート」を「削除と歪曲」したのは、グラムシ学者の間ではいまや常識である。

(注) 松田博「グラムシ研究の新展開」お茶の水書房

主要打撃論とヒットラーの勝利の後、コミンテルンは、七回大会(一九三五年)で、ディミトロフとエルリコ(トリアッティ)を中心に人民戦線戦術Ⅱ反ファッショ統一戦線を打ち出し、イタリアでの戦後のトリアッティⅡ構造改革路線へとつらなる。そこで目ざされた「統一」は、決してプロレタリアのヘゲモニーのものではない。例えるならば、この路線は、ドイツ独立社会民主党と同一線上にある(第二インターの独社民は三分解し、社民、スバルタクス、ブント(ローザ、リーブクネヒト)、独立社会民主党。つまり、平時にはマルクス主義を奉じて改良主義的革命を主張し、革命時には、革命的左翼に反対して資本主義を擁護することを本質とする。

この路線が、グラムシと無縁である事は、ごちゃごちゃと云う必要はなく、「力関係のメント」に関する論述を読めば明らかである。グラムシは、「情勢分析と力関係」(『選集1』、p.138)の中で、力関係を三段階にわけ、①下部構造と直接緊密にむすびついた社会諸力間の力関係、②政治諸勢力のあいだの力関係——この中で、イ)経済的・同業組合的段階↓ロ)レーニンの云う組合主義的政治↓ハ)ヘゲモニー(同業組合的水準においてでなく「普遍的」水準での闘争)とせり上がってゆく。そして第三のモ

限界点(レーニン「国家と革命」、『全集25』、p.488)。しかし、ルソーの時代、この「転化」を担うプロレタリアは、ようやくにして原始的蓄積によって小市民として萌芽的に形成されつつある段階であり、ルソーの永続革命は、文字通り、時代そのものの「限界」を表現した。革命の形態も、市民による(地域)コンミュンと街頭バリケード戦である。

ルソーの永続革命は、いまだ、主体が市民として、ブルジョアジーとプロレタリアの未分化の時代、分化しつつプロレタリア化しつつある下層小市民を表現しており、この分化は当然にも資本主義の発展、産業資本主義の確立を必要とする。そうして「市民」から分化したプロレタリアートが革命の舞台に現れたのが一八四八年二月革命である。マルクスは云う。「一八世紀の諸革命のような市民革命は、突進して成功に次ぐ成功をおさめ……中略……これに対して一九世紀の諸革命のようなプロレタリア革命は、たえず自己批判し、前進しながらもたえず歩みを中断し……中略……ついにかなる後退もできない状況が生まれ、情勢そのものがこう叫ぶのである。ここに薔薇がある、ここで踊れ！」(『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』)。

先にも述べたように、マルクスは、すでに「ヘーゲル法哲学批判序説」の中で、ドイツ革命は、プロレタリアによって担われなければならないと主張し、ドイツ三月革命に際して「彼らの関の声はこうでなければならない——「永続革命」と(一八五〇年三月の中央委員会の同盟員への呼びかけ)」と主張した。しかし、共産主義者同盟の「規約」や「挨拶」で述べられているように、

ドイツ革命に於いては、当面、小市民的民主主義派が権力を握るだろう。プロレタリアートはその最左派として独自性を保持し、革命的要求を続け、一五年、二〇年の内乱を通じて、社会主義革命へ転化させねばならないとされた。

従って、一八四八年のプロレタリアートは、歴史の舞台上上ったとはいえ、いまだ小市民的急進主義の最左派に位置し、形態的にもフランス革命の延長上に、バリケード街頭戦である。

マルクスとエンゲルスは、この二月革命の総括を通じて、このような永続革命論を放棄した。有名な「フランスに於ける階級闘争」への序文に於いて、エンゲルスは次のように述べる。「歴史は、われわれおよびわれわれと同じように考えたすべての人々が間違っていることをあきらかにした。当時はまだ大陸における経済的発展は、資本主義的生産を廃止しうるほどに成熟した段階には、とうてい達していなかったのだ。歴史はこのことを一八四八年以来大陸の全土を巻きこんだ経済革命によって、証明してみせた」。

このような永続革命論の放棄は、必然的に、プロレタリアの成熟をうながし、その独自性を保持する組織の問題を提起する。それは、国際労働者協会＝第一インターの創立となる。そして、マルクス自身は蜂起に反対だったとは云え、一八七一年のパリ・コミューンとして、一時的とは云えプロレタリアは権力を握った。これはまさに、資本主義が、帝国主義段階への移行を開始する入口の時であり、一八四八年から進んで、プロレタリアは、小市民的急進主義の一翼から、その独自の姿を登場させた。

「われわれの闘争がいかなる形をとるか」は、はっきり云う事はできないが、「最も私欲のない、最も勇敢な、最大の自由な組織のなかに結集した、階層を形成するならば、プロレタリアートは……隷属と搾取と無知とから生じているあらゆる不幸をついに全世界にわたって終息させる」ことができるとした。

以上、素描したように、革命論は、資本主義のそれぞれの発展段階に対応して、そしてその発展段階を表現して、又次の時代を切り開く。諸革命に対応して、ルソー的永続革命論からマルクスの永続革命論、そして、それを否定し、革命の具体的条件と客観性を分析する『資本論』を背景とする、第一、第二インターによる、プロレタリアの独自性と組織戦を経て、トロツキー云う所の革命の現実性（トロツキー「過渡的綱領」）が日程に上った帝国主義段階に於いて、再度、「永続革命」が登場する。だが、この「永続革命論」は、かつての永続革命論の単純な復活ではあり得ない。第一、第二インターの組織戦を媒介したいわば、否定の否定としてのそれである。

グラムシが、随所で永続革命論にふれているのは、以上述べたような意味で、この論が、革命理論の発展の検討にとって、要となると考えているからである。

我々も、ロシア革命でのトロツキー永続革命論と、レーニンの「二つの戦術」と「何をなすべきか」——この二つは不可分のものであって、トロツキーが後に自己批判的に述べているような、永続革命論は正しかったが、党の重要性を認めなかった所に過まりがあるというものではない——の検討を通して、グラムシのへ

それは、第二インターとなり、就中、ドイツ社会民主党と労働組合に表現された。

先に引用した序文でエンゲルスは、「ブルジョアジーおよび政府は労働者党の非合法活動よりも合法活動のほうを遙かに怖れるといったしまつになつてきた」と述べ、更に続けて、軍事技術の発達によって、一八四八年、七一年の主役であったバリケード戦によっては、支配者を打倒できないとした。

第二インターの代表的理論家カウツキーは、『権力への道』で——この著作は「マルクス主義的革命的革命家のうち誰も私を否認する者はなかった、ローザ・ルクセンブルグもクララ・ツェトキンも、レーニンもトロツキーも」——「権力への道」第三版への序文、河出書房、世界大思想全集、P171）——資本主義の発展そのものが労働者階級の数的増加をもたらし、「国民中の革命的分子の優越をいよいよ大きく形成するように作用し」（同上、P236）たが、それは、「さし当たって可能性において革命的である」として、かかる労働者の権力への道は、「まず第一に、多くの社会改良すなわち労働者保護に向けられ」、「労働組合方式の大闘争によって準備され強要され」、又、このような闘争は、資本家の反撃によって政治闘争へと発展してゆき、「このようにして、政治生活においては政治上の諸権利をめぐる闘争が前面にあらわれる」。

そして、民主主義的共和制の実現の要求と、帝国主義的政策によって国家資金が、労働者・人民のために使用されていない時、この軍国主義を除去することが必要である。帝国主義の「一般的不安の時代、不断の権力移動の時代に突入している」（P270）。

ゲモノー論の意義に迫りたい。

VII

グラムシが、再三にわたってトロツキーの永続革命論にふれ批判しているのは、決してスターリンが行ったようなタメにする批判ではない。確かに、ロシア共産党とコミンテルンでのスターリンの勝利とトロツキーの敗北と追放——スターリニズムの成立が、グラムシにも影響した事は事実であり、まして妻子をモスクワに置く身で慎重な態度が必要だった。

（注）グラムシとトロツキーについては、「トロツキーとグラムシ」（社会評論社）

だから、時には罵りに近い批判「かれの理論は、そのようなものとしては、一五年前も一五年後もけつしてよいものではなかった。……かれも大ざっぱにはいいあてたのだ……ちよつとそれは、四歳の幼女をみてこの子は将来母親になると予言し、その子が二〇歳で母親になったとき、『わたしの予言はあたった』というようなものである。」（『選集』I p179）を行うこともあった。

だが、論集「トロツキーとグラムシ」で多くの人が論じているような、永続革命論に対するグラムシの考えを専ら、スターリン——トロツキー問題として論ずるのは——それ自体誤りではではないが——外面的である。

グラムシにとって、永続革命論は、「資本論に反対する革命」に表現された自身の革命観の二重写しなのであり、従って永続革命論批判は、初期のグラムシ自身の批判＝自己批判であり、レーニンを媒介した「市民社会とヘゲモニー」という後期（「獄中ノート」）グラムシの革命観を端的に示すものであった。

このような視点で見えない限り、グラムシとトロツキー関係は、正しく把握することはできない。

また、その事は、あれ程のスターリン主義の猛威の中で（獄中であつたとはいえ）スターリニズムに対して独自性を確固として保ち得た理由である。

（注）「資本論に反対する革命」は、先に引用したが、第二インターの図式の破れの要因を二つの根拠から論じている。一つは、客観的要因として、大戦の災禍であり、二つは、「社会主義者の宣伝」——つまりポリシエヴィキ党の存在、ないしは、そこに表現される革命的伝統である。対してトロツキーは周知のように「複合的發展の法則」から論拠付けた。

レーニンの晩年の「わが革命について」（全集33）は、短いのだが、興味深いものである。グラムシの考えは、このレーニンの著作にきわめて近い。

グラムシは、「一八七〇年以後の時代には、ヨーロッパの植民地主義的膨張にともない、これらの要素はすっかり変化し、国家の国内的、国際的組織関係はより複雑に、より巨大になり、一八四八年当時の『永久革命』の定式は、政治学のみならずで仕上げられ、克服されて『市民的ヘゲモニー』の定式となった。」（選集1

を矮小化した上で、なおかつ「暴力」を否定する。

（注）このような主張は、レーニン「国家と革命」を念頭に置いたものである。「国家と革命」へのこのような「読み」は、竹内氏だけのものではなく、新左翼陣営でも多い。恐らく、「ドイツ・イデオロギー」での「共同的利害の幻想」（廣松沢 岩波文庫B10）、グラムシ流には「同意と強制」という資本主義社会特有のブルジョア民主主義的支配をレーニンは、一面化しているという主張であろう。

しかし、このような主張は、第一に、「国家と革命」がどのようなシチュエーションで、何を目的に書かれたかを理解せず、第二に、矮小化している。

周知のように、この著書は、「革命の経験をするには、それを書くことよりも愉快であり、有益である」（全集25, p533）一九一七年の権力奪取、暴力革命＝武装蜂起の直前に書かれたものである。

従って、そこでのテーマは、ブルジョア国家の支配のあり様というより（むしろ、一八七〇年以降の帝国主義段階でのその諸特徴を述べているが）国家の本質と、その廃絶と死滅という点にあった。だからエンゲルスの「家族・私有財産および国家の起源」から多くを引用し依拠しているのは偶然ではない。また国家＝暴力装置という事も確かにあるが、それは、国家の本質を「階級対立の非和解性の産物であり」「一階級が他の階級を抑圧する機関」とした上での、その本質から出てくる属性として述べている事は、「国家と革命」冒頭部のエンゲルスからの引用によって明らかである。

（注）と、資本主義の産業資本主義段階に対応する革命論としての永久革命論は止揚され、帝国主義段階での経済・社会・国家の変化に対応してヘゲモニー論があるとし、陣地戦が登場し「機動戦を、たんに部分的なもの」（同上）としたと述べている。そして、永久革命論を止揚し、ヘゲモニーの概念を創り出したのは、ロシア革命とレーニンであった。我々も、ここで、この永続革命論とヘゲモニー論の検討をするために、ロシア革命でのトロツキー、レーニンの革命論を検討しなければならない。

日本の新左翼（第一次ブント）は、スターリン主義からの脱却と批判の過程で、一国社会主義論に対する世界（同時）革命、二段階戦略に対する一段階社会主義革命をはじめ多くのものをトロツキーに負うている。

だが、同時に、自然成長的急進主義という負の遺産も受けついでいる。

また、日本の多くの「グラムシ主義者」は、グラムシが、何度自分のかかわらず、それを否定する。例えば、竹内良知は「レーニンは、革命的意識がプロレタリアートの生活経験の自然発生の所産ではないことを力説した。……ブルジョア秩序を強制的秩序ととらえていたし、彼のヘゲモニー概念は倫理的・文化的意義をもっていないかった。そこから、国家はもっぱら強制機関であり、それに対しては「革命的」暴力が対置されるべきであると考えられた」（グラムシと現代）p.23 お茶の水書房」と、レーニン

また、レーニンが、民主主義について十二分に理解していた事は、「国家と革命」の中での「徹底した民主主義」についての論及や、また民族自決権についての見解からして言を待たない。

また、国家のイデオロギー的支配を見ていないといった批判は、そもそもレーニンの自然発生性と目的意識性という、いわゆる外部注入論は、支配者階級と国家のイデオロギー支配があるからこそ出て来る論理である。笑止と言わねばならない。そもそも、グラムシのヘゲモニー論は、階級同盟とプロレタリアートの指導とこの目的意識性＝社会民主主義的意識という不可分の二つのレーニンの考えを継承するものである。

このようなレーニンを矮小化した上で、あたかもスターリニズムの源流の如く仕立て上げる俗論は、排除されねばならない。

VIII

周知のように、トロツキーの永続革命論は、一九〇五年のロシア第一次革命の総括として書かれた「結果と展望」と、より成熟した形で「ロシア革命史」で展開されている。他方、レーニンの考えは、やはり一九〇五年革命を受けて「民主主義革命における社会民主党の二つの戦術」と一九一七年の革命に際しての「四月テーゼ」とそれを詳述した一連の論文——「戦術に関する手紙」、「わが国の革命におけるプロレタリアートの任務」（全集24）——に見る事ができる。

トロツキーは、「ブルジョア革命の重荷を全部プロレタリアートの肩に負わせるといふ、わが国の社会的関係……」（岩波版「ロシア革命史」5頁）「結果と展望」の中では、ブルジョア革命のない手は労働者階級であり——「農民は自立的な政治的役割を果たす力をまったくもっていない」（同上）。従って「社会主義的多数者を擁する革命政府にいったん権力が掌握されれば、最小限綱領と最大限綱領とのちがいは原理的な意味も直接の実践的な意味も失う。」（同上）「それゆえにこそ、ブルジョア革命の中でプロレタリア独裁のなんらかの特殊な形態、つまりプロレタリアートの（ないしはプロレタリアートと農民の）民主主義的独裁などは問題になりえない。労働者階級はみずから民主主義綱領の境界を越えずには、みずからの独裁の民主主義的性質を保障しえない」（同上p42）

そして、この革命の最終的勝利は、ヨーロッパ先進国革命との結合によってのみ保障されるとした。

このような一九〇五年での考えは、「ロシア革命史」では、「複合的發展の法則」にもとずいて説明される。「歴史的法則性は公式主義者の図式主義とは縁もゆかりもない。……相異なる發展段階の接合、別々の段階の結合、時代遅れの形態ともっとも近代的な形態のアマルガム（渾然）という意味で、複合的發展の法則と名づけていい。」（「ロシア革命史」岩波文庫版195頁）「複合的な發展の法則はここでわれわれのままで極端な形で発現する。すなわち、革命は中世の腐敗物の解体からはじめて、数ヶ月のうちに共産党を指導者とするプロレタリアートを権力の座につけるの

にするための半プロレタリア大衆を味方にひきつけ社会主義的変革をやりとげなければならない。」（同上）

このような徹底した民主主義を実行するものとして人民の武装蜂起に依拠した「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」をかかげた。これは、社会主義ではないが徹底した民主主義を実行すると共に「最後と言っても重要なことだが、革命の火事をヨーロッパに飛び火させるといったことができる」（同上）

ここに流れているのは、プロレタリアートのヘゲモニーと革命の徹底性—永続革命の思想であり、同時に、第一インター以降の革命の客観性（客観的条件）という考えである。だが、このレーニンの精神を形式的にしか理解しなかつたオールド・ポリシェヴィキが、一九一七年二月革命に際して「民主主義的独裁」は、いまだ実現されないととして、当面の課題をブルジョア民主主義の枠に限定しようとした。

レーニンの四月のロシア帰還による「四月テーゼ」によるトロツキー言う所の「党の再武装」が必要だったのは周知の事である。「ロシアにおける現在の時期の特異性は、プロレタリアートの自覚と組織性が不十分なために、権力をブルジョアジーにわたした革命の最初の段階から、プロレタリアートと貧農層の手中に権力をわたさなければならぬ革命の第二段階への過渡ということにある」（全集24頁）「四月テーゼ」と述べ、カーメネフらオールド・ポリシェヴィキの労働者農民の革命的民主主義的独裁はいまだ成立していないという見解に対して、それは二重権力——一方でブルジョアジーによる権力と、ソヴィエトという形での労

である。」（同上p6）

レーニンは、「二つの戦術」で言う。「ロシアの資本主義とツァー絶対主義のもとで、ブルジョアジーは「ツァーリ政府の打倒」を要求せず、臨時政府というスローガンもかかげていない。ツァーリと革命的人民のあいだで、できるだけ平和な取引き……」として、ロシアの当面する革命がブルジョア民主主義革命であるが、ブルジョアジーは、すでに去勢されている。（トロツキーと同様の認識）このような中でプロレタリアートは、「ブルジョアジーの助手の役割をはたすか、それとも、人民革命の指導者の役割をはたすかである。」（同上）とプロレタリアートのヘゲモニーを主張する。だが同時に、トロツキーと異なり「臨時革命政府の任務は最小限綱領の実現だといっており、臨時政府によって最大限綱領をすぐの実行せよとか社会主義的変革のための権力を奪取せよといったばかげた半無政府主義的考えを排除している。……ロシアの經濟的發展の程度（客観的条件）と広範なプロレタリア大衆の自覚と組織の程度（客観的条件と密接に結びついている主体的条件）から言って、労働者階級をいまずに完全に解放することは不可能である」「ただ一つの正しい道つまり民主共和制という道をとって社会主義的変革への第一歩を踏みだす」

「プロレタリアートは、実力で専制政府の抵抗をおしつぶし、ブルジョアジーの動揺性に左右されないようになるため、農民大衆を味方にひきつけて民主主義的変革を最後まで遂行しなければならぬ。プロレタリアートは、実力でブルジョアジーの抵抗をおしつぶし農民と小ブルジョアジーの動揺性に左右されないよう

農独裁———の中のソヴィエトとして「すぐ間際まで到達している」（全集24頁）「わが国の革命におけるプロレタリアート任務」。二月革命は「二つの独裁、ブルジョアジーの独裁と、プロレタリアートと農民の独裁（労働者・兵士代表ソヴィエト）」とが、いっしょに一つの絡みあつたものをつくりだした。（全集24頁）「同上」。しかし、そのソヴィエトは、「プロレタリアートの自覚と組織性が不十分なために、権力をブルジョアジーにわたして」いる。とするならば、プロレタリアートの次に進む道は、ブルジョアジーを打倒するプロレタリア革命、「労働者政府」を樹立する事ではないのか、レーニンは、それに対して否とする。「われわれが主観主義に、すなわち、まだ完成されていない———まだ農民運動をおわっていない———ブルジョア民主主義革命を」とびこえて「社会主義革命へすすもうとする願望に、陥る心配はないであらうか？ もし私が「ツァーリをやめて労働者政府を」とでも言ったのであれば、そういう心配があつたであらう。「私が言ったのは、労働者・貧農・兵士・農民代表ソヴィエト以外の政府はありえないと言ったのである」（全集24頁）「戦術にかんする手紙」

しかし、そのソヴィエトでは農民・兵士と小ブルジョアが優勢である。従って、「きつぱりと、最後のに、運動のプロレタリア的、共産主義的分子を、小ブルジョアの分子から分離させること」が必要である。

このようにプロレタリアートのヘゲモニーの独自性を貫く事が、事態がどのように進展するにしても——「ブルジョアジーに

従属しない、独自の独立の「プロレタリアートと農民の独裁」がロシアになお出現するばあいには、小ブルジョアジーが、ブルジョアジーから分離できないで、ブルジョアジーとわれわれのあいだを永久に動揺する場合でも——「運動の利益をたたく表現するもの」(同上)なのである。

しかし、この独自性を貫く事は、カーメネフが言うように「ブルジョア民主主義革命をただちに社会主義革命に転化すること」を「目あてにしているものではない。

このような内容のない空文句、図式的公式から出発するのでなく、「労働者・兵士代表ソヴィエト」とはいつたいなにか、それは、その型から見て、議会的共和制よりもいっそう高度なものかどうか、そんな人民にとってより有用なものかどうか、より民主的なものかどうか、たとえば、食糧不足等々の克服のための闘争により適したものであるか(同上p38)「私が、目あてにしている」のは、労働者や兵士や農民は、穀物の増産、パンの分配の改善、兵士の休養の改善等々の困難な実践的問題を官吏よりもうまく、警官よりもうまく処理するだろうということにすぎず、もっぱらそれだけのことである(同上)

そして「もっぱらそれだけ」を副題の「プロレタリア党の政綱草案」として提起したものが「わが国の革命におけるプロレタリアートの任務」(全集24 p36)であった。

それは、戦争に対する態度、二重権力(新しい国家の型—「国家と革命」へ続く)農業綱領と民族綱領、銀行とシンジケートの国有化、第三インター創設の提起、党名変更という包括的内容を

このような四月段階での、四月テーゼと「わが国の革命におけるプロレタリアートの任務」から、より「社会主義に近づく」のは、「さしせまる破局、それとどうたたかうか」(全集25 p36)一九一七年九月執筆)である。

そこで述べられている事は、「政綱」としては先の「プロレタリアートの任務」と同一である。だが、二月革命以降のブルジョア権力(ケレンスキー内閣)は、一方では依然として帝国主義戦争を続け、国内的には、破綻した経済へ有効な手を打てず、人民の飢えを増大させ、また、農民の解放にも手をつけない。

その中で、プロレタリア・人民の支持は、ポリシェヴィキに集まりソヴィエト内多数派を形成しつつあり、少数派時点での「早すぎる蜂起」に徹底して反対し、多数派になるための「宣伝」こそ、最も実践的「行動」であるとしたレーニンが、武装蜂起による権力奪取を具体的日程に登らせつつあった時にこの書は書かれた。

そのような破局は「ブルジョアジーの支配は、真に革命的な、真の民主主義とはあいれないものだ、ということに帰着する。二〇世紀には、資本主義国では、社会主義にむかってすすむことをおそれては、革命的民主主義者であることはできない」(同上 p383)

そして、銀行の国有化等の「政綱」が「民主主義的なものではなく」すでに「社会主義的方策」ではないかという非難に対して、次のように答える。

簡便にまとめたものである。そこでの国有化の問題は、「小農の国では、プロレタリアートの党は、住民の圧倒的多数が社会主義革命の必要を認識しないうちは、けっして社会主義の「導入」を目標にすることはできない。しかし、この真理を根拠にして、実践的に完全に時代が熟しており、戦争中にいくつものブルジョア国家によって実現され、せまりきたる完全な経済的解体や飢餓を避けるための緊急に必要な即時の革命の方策を先へ延ばすことになる政策を正当化するのには、「マルクス主義まがい」「土地の国有化や、すべての銀行と資本家のシンジケートの国有化、あるいは少なくともそれらに対する労働者代表ソヴィエトの即時の統制の実施等々の方策は、けっして社会主義の「導入」ではないが無条件に主張しなければならぬ。……これらの方策は社会主義への譲歩にすぎず、経済的に完全に実現できるものであるが、それらの方策によらないでは、我等によって負わされた傷をいやし、さしせまる崩壊を阻止することはできない」(p57)

以上のように、レーニンは、トロツキーと共にメンシェヴィキやカーメネフらオールド・ボルシェヴィキの小ブルジョア的方向に対して、「プロレタリアートのヘゲモニー」を主張した。だが、社会主義の導入ではなく、戦争のもたらしたプロレタリア・人民への災禍、ロシアの現実から出発して、それを解決するため、後の「国家と革命」の用語でいうならば「徹底した民主主義」という観点、労働者・農民の独裁の貫徹、その「政綱」として当面の課題を提出した。

帝国主義は、独占資本主義である。そして帝国主義戦争の時点で、国家の統制・介入が強化され「国家独占資本主義に成長転化している」だとすれば、国家が独占資本のためのものから「革命的民主主義的国家」に取ってかわり、革命的民主主義的国家プロセス国家独占資本主義は、「不可避免的に社会主義にむかっての第一歩あるいは数歩を意味する」(p38)

かくて「帝国主義戦争は、社会主義革命の前夜である。」(p38)その意味は、「戦争がその惨禍によってプロレタリアの蜂起を生みだす」(同上)だけではなく、「もし社会主義が経済的に成熟していないならば、どのような蜂起も社会主義を生みだしはしないだろう。国家独占資本主義が、社会主義のためのもっとも完全な物質的準備であり、社会主義の入口であり、それと社会主義と名づけられる一段のあいだにはどんな中間的段階もないような歴史の段階の一段であるからである」(同上)

レーニン自身が言うように革命の性格は、誰が国家権力を握ったかによるとすれば、ロシア一〇月革命がプロレタリア社会主義革命である事は明白であり、また、二月一〇月の革命が一連の連結するものと考えらるならば、最小限、最大限綱領の垣根はない」とするトロツキーの永続革命論(複合的発展の法則に裏打ちされた)が正しいもののように見える。また、二月ブルジョア革命、一〇月社会主義革命と考えるならば、後にスターリン(コミンテルン六回大会)によって規定された二段階革命論が正しいように見える。

だが、これらは、まったく正しくない。

トロツキーの永続革命は、グラムシも言う通り、一般的予見としては、過ちではない。だが、抽象的であり、それが一般的に適用される時——具体的には後の中国革命論——空疎になる。(ロシアに於いては、自国であるだけに「ロシア革命史」に書かれている通り、かなり具体的なロシアの分析があり、抽象性をまぬがれている)

トロツキーが、永続革命論を論拠付けた不均等発展と複合的發展の「法則」は、それ自体として言えは誤りではない。しかし、先に見たようにマルクスの革命論の発展を見るならば、それを「法則」として一般的に適用するならば必ず誤りに陥る。マルクスにおいては、「ヘーゲル法哲学批判序説」段階での革命論→「共産党宣言」時点での即ち共産主義者同盟時点での「関の声は永続革命」といった時の革命論——それは、いわば「ドイツ・イデオロギー」による史的唯物論成立時の革命論であり→「史的唯物論を導きの糸」として「資本主義の運動法則」を暴露する事とセットになったプロレタリアートの組織と、小ブル民主主義派からの独自性の確立を前提とする革命論という深化のプロセスがあったが、トロツキーの永続革命論は、資本主義の運動法則の分析を抽象的な「複合的發展の法則」におきかえるものである。

他方、スターリンの二段階戦略は、レーニンの革命的な精神を抜き取った形而上学である。なる程、レーニンは、先に引用した「二つの戦術」に於いて、社会主義は民主共和制の道を通つてのみ成立すると述べている。

理感覚は、原理と現実の落差を認識するという意味で、レーニンの天才的な「現実感覚」を同時に意味している。

これは終わってしまったえば、帝国主義段階に於いては、後進(資本主義)国に於いても、民主主義革命から革命が開始されたとしても、社会主義革命へと連続する(トロツキー的に永続革命論であれ、スターリンの「強行的に転化する二段階革命論」であれ)と総括する事はできるであろう。だが、そういう事によって、レーニンの革命精神とその革命思想の核は、失われ、解釈と予見となる。

レーニンの革命論——「二つの戦術」→「四月テーゼ」→「国家と革命」と続く——を理解するためには、その経済理論と、党組織論を同時に見なければならぬ。

レーニンの強さは(「いわゆる市場問題について」)「ロシアに於ける資本主義の発展」→「ロシア社会民主党の農業綱領」⇨「二つの道」の理論→帝国主義論という資本主義分析を持っていた事、及び「何をなすべきか」という党組織論を持っていた事である。先に分析した「二つの戦術」以下の革命論は、この二つの領域と密接不可能にいわば、レーニンの「三つの源泉」を構成している。

後のグラムシとの関係からしても、「土台」の分析を通じた階級関係(国家イデオロギー)を論じるレーニンの方法の重要性を見てもおかげにならない。

「発展」は、ロシアに於ける資本主義の発達を不可分とするナロードニキに対する書である。「資本論」二巻の「実現論」に即

だが、そこで言われているのは、民主主義革命→社会主義革命という二段階の時間的順序ではない。

そこで言われているのは、客観的な経済の発展の状況、それに規定された階級関係、そこから出て来るプロレタリアートの解決すべき課題の中で、一貫してプロレタリアートの独自性を貫徹して革命のプロセスに、プロレタリアートの独自性を刻印する事である。

晩年に書いた「わが革命について」(全集33)で、「農民戦争」と労働運動との同盟をわれわれが実現することができるような一定の条件のもとにおいたら、どうなるだろうか?」とのロシア革命成立の条件をあげているが、労働独裁が、民主共和制の道を通つて、どのように展開するかは、レーニンが言うように「誰も予見」はできない。必要なのは、プロレタリアの独自性を堅持して「革命的」民主主義を徹底的に推進することなのである。

そして、現実には破局がおとずれた時——それは「わが革命について」でレーニンがあげているもう一つの条件、帝国主義戦争の惨禍によつてもたらされた——この革命的民主主義は、社会主義を要求し、それなしに実現されないものであった。

以上のようにレーニンの「二つの戦術」→四月テーゼ→さしそまる破局→「国家と革命」と続く革命思想は、プロレタリアと農民の革命的・民主的独裁を軸にその徹底が、帝国主義戦争の惨禍の中で、いわば、結果として社会主義に到達するというものであった。

ここに藤田省三の言う所のレーニンの「原理感覚」があり、原

して「実現の不可能」を論じるナロードニキを論じた上で、資本論の直接的生産過程の論理的⇨歴史的な展開をロシアの現実性に即して適用し、「資本論」1巻に即して農民層の分解からはじまる農業における商品経済と資本主義の発展を論じ(第二章⇨四章)、五章以下、小営業→マニユファクチャー→機械制大工業と資本主義の発展を論証している。

なおかつ、「いわゆる市場問題について」以来の「ロシアにおける資本主義のための国内市場が、どのようにつくられつつあるか」(全集⇨「発展」の序文P28)を論じた。その事の当然の帰結は、それぞれのウクライナに対応した人口⇨階級の姿が具体的に把握される事でもあった。「ロシアの社会経済的構造と、したがってまた階級構成との分析がなされているが、いまではその分析は、革命の途上でのすべての階級の公然たる政治的行動によって立証された。プロレタリアートの指導的役割はまったくはっきりした。」(一九〇七年に書かれた「第二版への序文」)

だが、後に「農村に於ける資本主義の発展の程度を過大に評価した」(一九〇五〜七年のロシア革命における社会民主党の農業綱領)全集13 P290)として、いわゆる「二つの道」——即ち、「土地所有の中世的形態が」上からなくずし、改良主義的に行われる「プロシヤ型」形態と、イギリスやアメリカ南部で革命的・暴力的に行われた「アメリカ型」——の理論を展開した。そして、この理論こそ、メンシェヴィキの当面するロシア革命は民主主義革命であるが故に、その主体はブルジョアジーであるとする「公式」、そしてブルジョアジーが地主と妥協し手を組んで行

プロシヤ型の資本主義の発展を左から支える主張に対して、労働者・農民の革命的・民主的独裁論——ここでは農民は、アメリカ型のコースによってそれまでの土地所有制度を革命的に転覆し、土地の国有化をはかる、そのような「農民戦争」と手をたずさえたプロレタリアート主導の革命的経済的階級の根拠の理論であった。

そして、「帝国主義論」と、それを前提とする一九一七年革命前後の綱領改訂に於いて、ブハーリンの、綱領の理論的部分をいさなり帝国主義の特徴付けから入るべきだという主張を「商品生産は資本主義を生み、そして資本主義は帝国主義に導いた」（全集27 p.28）と退けた。

これら一連のレーニンの考えは、産業資本主義をモデルとした原理論があつて経済政策論としての帝国主義論（段階論）があるという宇野経済学の考えとまったく異なるものである。生産過程の発展——帝国主義においては独占——コンピネーション（ヒルファーディング「金融資本論」）をベースに、また、「発展」も直接的生産過程の発展がロシアに於いては、どのように展開されているかをベースとして市場の形成を論じている。

「二つの戦術」や「四月テーゼ」、これらの基礎に「発展」「二つの道」「帝国主義論」が密接にリンクし、それらの革命論の経済的・階級的基礎をなしている事はきわめて重要な事である。

このようなレーニンに対するトロツキーの永続革命論の根拠と判し、「プロレタリアの意識性の永続のほかには、われわれの成功の他のいかなる基盤もわれわれは持ち合わせない……政治的代行という「加速的」方法をきっぱり拒否しなければならぬ」（一九〇四年「われわれの政治的任務」とし、それに對置して「プロレタリアートの客観的利害とその主観的意識とのあいだに横たわるへだたりをわれわれが克服する時……われわれは決定的勝利の時点に到来する」（同上）。そして、そのへだたりを克服する主要な手段は、「党は階級の組織された意識」であると同時に「組織された意志」であるが——その意志を表現するのは「政治的戦術」であるとした。「同志レーニンにとって、政治的戦術の問題ではなく、それは哲学的教義の問題なのだ」（同上）これは、ルカーチがローザを特徴付けた考えと同一のものである。

永続革命論は、複合的発展の法則」にもとづいて、民主主義革命と社会主義革命の一挙の展開を主張する。だが、これらの進展は法則による必然的帰結ではなく、蓋然性である。蓋然性は、一方で、経済的・社会的発展の状態（土台）に客観的基礎を持ち、他方で、それ（土台）と密接に結びつきつつ相対的独自性を持つプロレタリア・人民の意識と組織の発展の度合によつて、その帰結はさまる。そこに、党の決定的重要性がある。

そしてレーニンは、党の役割を次のように述べる「これらのストライキは、組合主義的闘争であるが、いまだ社会民主主義的闘争ではなかった。それは、労働者と雇主との間の敵対的覚醒を示していたが、労働者は自分たちの利害が、現在の政治的社会的体

なる「歴史の不均等発展」とそこから出てくる「複合的発展」の法則は、資本主義の分析とは言えない。それは、いわば、結果の説明であつて、具体的なロシアに於ける資本主義の発展とそしてそこから必然的に出てくる階級構成を規定するものではない。なる程、「ロシア革命史」に於いては、ロシアに於ける資本主義の発展の過程と、その特殊性（例えば、外国資本の役割）が述べられてはいる。だが、それは「資本の運動法則」を分析するものではない。ロシアに於いては、まだしも自国の事として、特徴付けは具体性を持っていた。しかし、中国革命等になると、この複合的発展の抽象性はいかんともしがたい程に具体性を欠き、プロレタリアートのヘゲモニー一般にならざるを得ない。

（注）ついでながら毛沢東の一連の分析は、階級構成について、誰が味方で、誰が敵かと分析されているが、本来、その前提となるべき「中国に於ける資本主義の発展」は、どこにも見当たらない。

トロツキーとの関係に於いても、また後に述べるグラムシとの関係に於いても重要なもう一つの事は、「何をなすべきか」に代表されるレーニンの党組織論である。

トロツキー主義者は（トロツキーにならつて）、永続革命論は正しいが、党組織論がトロツキーになかつたと考えている。だが、その事が、実は（トロツキーの）永続革命論からの必然的帰結であり、同一の事の表裏だとは考えない。

トロツキーは、ロシア社会民主党のボリシエヴィキとメンシエヴィキの分裂に際して、レーニンを「政治的代行主義」として批

制と非和解的に対立しているという意識、すなわち社会主義的意識をもつていなかった」（全集5「何をなすべきか」）。そして、それは外部から持ち込まれねばならない、「社会民主主義は、労働運動と社会主義の結合である。その任務は、労働運動の各段階ごとに、この運動に受動的に仕えるのではなく、総体としての全運動の利害を代表し、労働運動に終局目標と政治的任務を明示し、その運動の政治的・思想的独自性を守ることである」（「われわれの運動の緊急の任務」全集4）

「組合主義的意識、すなわち、組合に団結し、雇主と闘争し、政府から労働者に不可欠なあれこれの法律の発令をかちとることなどが必要であるという確信」にとどまる事は許されない。

「政治闘争の任務を軽視する者は、社会民主主義を人民の護民官（トリビュン）から、労働組合（トレード・ユニオン）の書記に変えてしまうものである。」（「二つの戦略」全集9）

レーニンの「何をなすべきか」に於ける自然発生性＝組合主義的意識と目的意識性＝社会民主主義的意識は、より直接的には、当面するロシア革命に於ける必然的な一つの（永続革命というコース）ではなく、可能な二つのコース——プロシヤ的、ユンカー的ブルジョア革命か、アメリカ型の農民戦争と同盟した徹底した民主主義＝労働者・農民の革命的・民主主義的独裁——の中で、革命的コースを達成するための「何をなすべきか」なのである。従つて、いわゆる労働同盟＝ヘゲモニー論と「何をなすべきか」の組合主義的意識（グラムシ流に言えば同業組合的意識）と社会民主主義的意識——一言で言えば外部注入論は、表裏の一体の物

であり、同様にトロツキーの永続革命論と「われわれの政治的任務」のいわば「戦術の党」は一体のものである。

そして、この事は何度も言うようにマルクスの永続革命論―第一インスター（第二インスター）をふまえた否定の否定としての真の永続革命論は、トロツキーではなく、レーニンに継承されているのである。

資本主義の帝国主義段階への移行に伴う革命の形態の変化は、先に引用したエンゲルスの「フランスにおける階級闘争への序文」〔注〕言うまでもなく、この序文の改竄については「あきれたことに、この抜粋のしかたたるや言語道断で、わたしが合法性を賞美してやまない穩健屋に仕立てられている」（エンゲルス 一八九五年四月一日付カウツキーあての書簡）、「あの連中のなまぬるい限りの暴力放棄戦術のうしろだて使えそうな部分だけを、抜き出したのだ。かれらはしばらく以前から、そしていまとくに、このんで穩健な戦術を説いている」（四月三日 ラファルグへの書簡）とエンゲルス自身が書いている。

に先駆的にふれられただけでなく、特にロシア第一回革命の衝撃によってアプローチのちがいはあれ共通の認識であった。ローザの「マッセンストライキ・党および労働組合」〔注〕、ソレルの「暴力論」での神話ゼネスト「革命的であった頃の」カウツキー、そしてレーニン、ア。

〔注〕この有名な書に於いて、ロシア革命を論じながら、マッセンストという工業を基礎として独占段階特有の新しい戦術を評価しながら、ソヴィエトについて言及がないのは、奇妙な事でもあり弱点であろう。それは一九〇五年段階だったからと時代の制約にすることはできない。表題が示す通り、

党と労働組合という伝統的枠を越えられず、もう一つの労働者権力という視点は、大戦後の「レーテ」の登場によってはじめて持つ。ペトログラードソヴィエト議長だったトロツキーはもちろんだが、レーニンは、すでに、蜂起の機関（の可能性）として、この組織に着目し評価している「われわれの任務と労働者代表ソヴィエト」（全集10）

例えば、ローザ・ルクセンブルグは、「一八四八年の革命が幻滅に終わり、マルクスとエンゲルスが、プロレタリアートは直接に直線的に社会主義を実現しうる状態にある、という見地を放棄して」（ローザ選集4 p.30「綱領について」）「その闘争形態、確固たる態度、目的の明確な意識、戦術の幅、などにおいて、一般的な国際情勢の進展を見きわめ、資本主義社会全体が到達している成熟の度合を熟慮することが不可欠であろう。ロシアのプロレタリアートは、一八四八年と一九〇七年とのあいだの半世紀以上にわたる資本主義の発展が、全体として、ブルジョア階級国家の創生期に位置するものではなく、むしろすでに始まった終末の序曲をなしている。」（選集2 p.12）「ロシア社会民主労働党ロンドン大会における演説」と明確に新しい帝国主義段階での「革命の現実性」の到来を認識していた。

しかし、革命論（政治理論）、経済理論、党組織において、この課題に答えたのは唯一レーニン一人であった。永続革命の関（とき）の声は、第一インスター、第二インスター、あるいは「資本論」を媒介して、ロシア革命とレーニンに否定の否定としてよみがえったのである。（以下、次号）